阿蘇山の火山活動解説資料

福岡管区気象台
地域火山監視・警報センター

＜噴火警戒レベルを３（入山規制）から２（火口周辺規制）に引下げ＞

阿蘇山では、８月14日に火山性微動の振幅が増大し、中岳西山腹観測点南北動成分の１分間平均振幅で概ね6.0μm/sと、4.0μm/sを超えさらに大きな状態となりましたが、18日頃から振幅は低下した状態で推移しています。

17日以降に山麓において実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量に急激な増減はみられません。

これらのことから、火山活動に低下傾向が認められます。中岳第一火口から１kmを超え、概ね２kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性は低くなったと判断し、本日（９月１日）16時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを３（入山規制）から２（火口周辺規制）に引き下げました。

一方、GNSS連続観測では、2026年５月頃から草千里を挟む基線及び広域の基線において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は多い状態となるなど、火山活動は高まった状態であることから、引き続き中岳第一火口から概ね１kmの範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。

【防災上の警戒事項等】

中岳第一火口から概ね１kmの範囲（図１）では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスに注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○　活動概況

阿蘇山では、８月12日19時頃から火山性微動の振幅が増大し、大きな状態となりました。14日15時過ぎには中岳西山腹観測点南北動成分の１分間平均振幅で概ね6.0μm/sと、4.0μm/sを超えさらに大きな状態となりました。その後、振幅は増減を繰り返しながら概ね大きな状態で経過しましたが、18日頃に低下し、本日（９月１日）は1.2μm/s程度とやや大きな状態で推移しています。

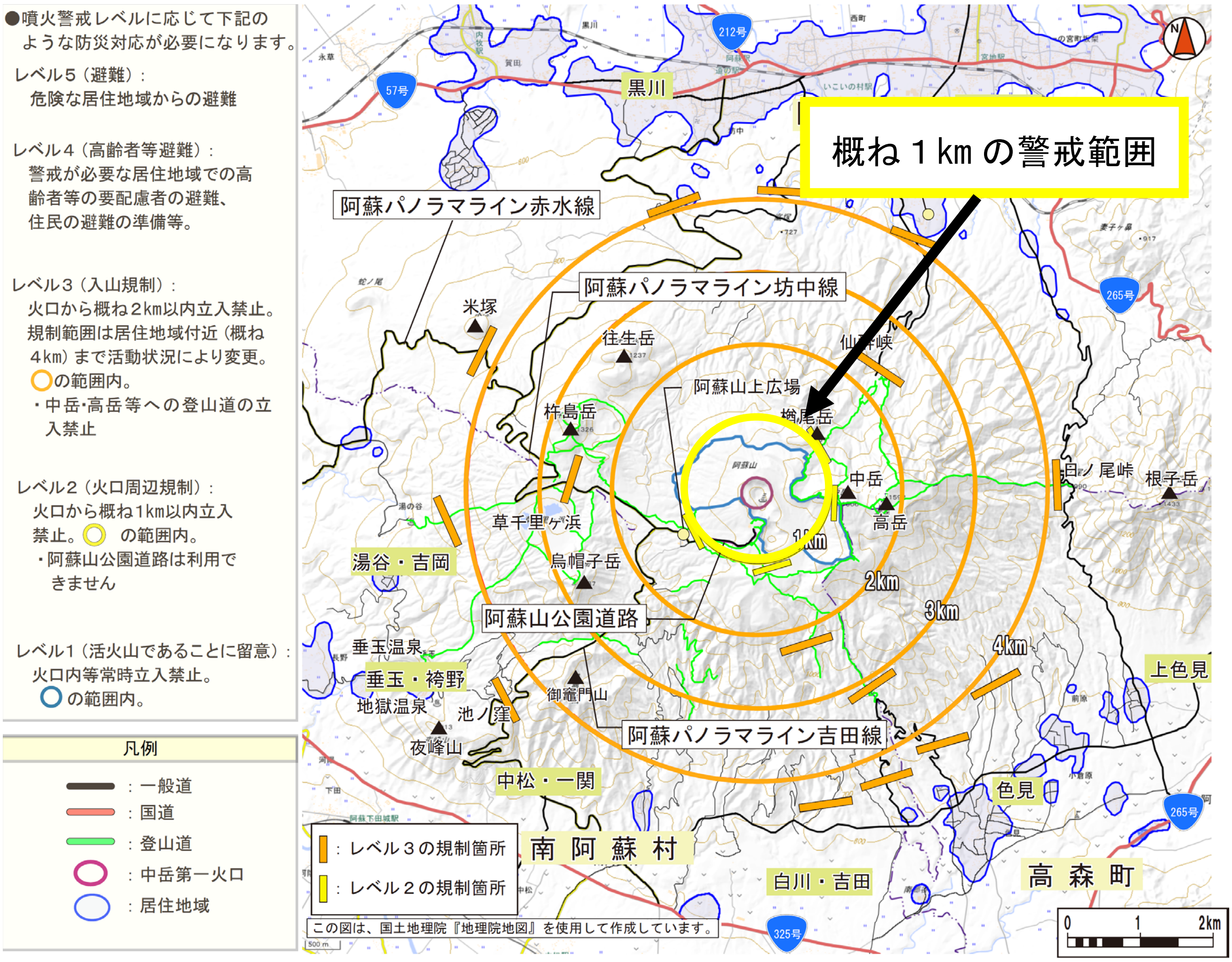
８月14日に山麓において実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の１日あたりの放出量は2,700トンとそれ以前と比べて急増しましたが、17日以降は1,000～2,300トンと変化はあるものの急激な増減はみられません。

８月14日以降、中岳第一火口では噴煙の状況に特段の変化はなく、白色の噴煙が最高で火口縁上1,100ｍまで上がりました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。
https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php
本資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。
https://www.jma.go.jp/jma/kishou/know/kazan/kazanyougo/mokuji.html

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、九州大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び阿蘇火山博物館のデータも利用して作成しています。
資料の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50ｍメッシュ（標高）』を使用しています。

一方、GNSS 連続観測では、2026 年５月頃から草千里を挟む基線及び広域の基線において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は多い状態となるなど、火山活動は高まった状態であることから、引き続き中岳第一火口から概ね１km の範囲に影響を及ぼす噴火が発生する可能性があります。



■この図は、熊本県による阿蘇山火山防災マップをもとに、熊本県火山防災協議会、阿蘇火山防災会議協議会及び地元自治体と調整して作成しています。
■各レベルにおける具体的な規制範囲等については、地域防災計画等で定められていますので、詳細については阿蘇市、高森町、南阿蘇村にお問い合わせください。

図１　阿蘇山　警戒が必要な範囲

中岳第一火口から概ね１kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。また、火山ガスに注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

※居住地域は火口から 4km以上離れている。

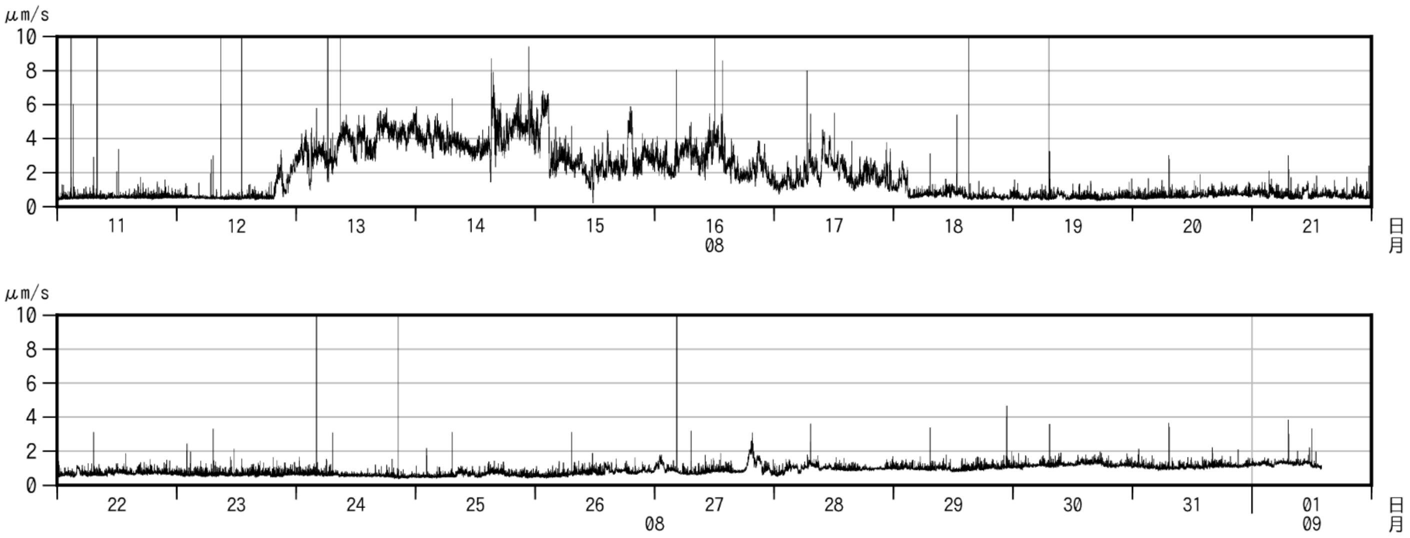


図２　阿蘇山　火山性微動１分間平均振幅
（中岳西山腹観測点南北動成分、８月 11 日～９月１日 14 時 00 分）

８月 12 日 19 時頃から火山性微動の振幅が増大し、大きな状態となりました。14 日 15 時過ぎには中岳西山腹観測点南北動成分の１分間平均振幅で概ね 6.0μm/s と、4.0μm/s を超えさらに大きな状態となりました。その後、振幅は増減を繰り返しながら概ね大きな状態で経過しましたが、18 日頃に低下し、本日（９月１日）は 1.2μm/s 程度とやや大きな状態で推移しています。

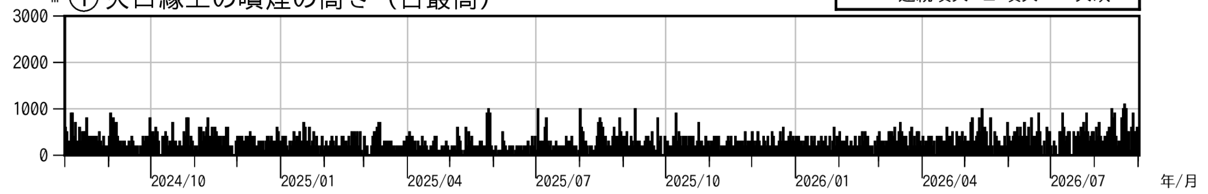
１分間平均振幅で毎日 07 時 20 分頃にみられる振幅の高まりは校正信号によるものです。

図３（次ページ）　阿蘇山　火山活動経過図（2024 年８月～2026 年９月１日 14 時 00 分（速報値））

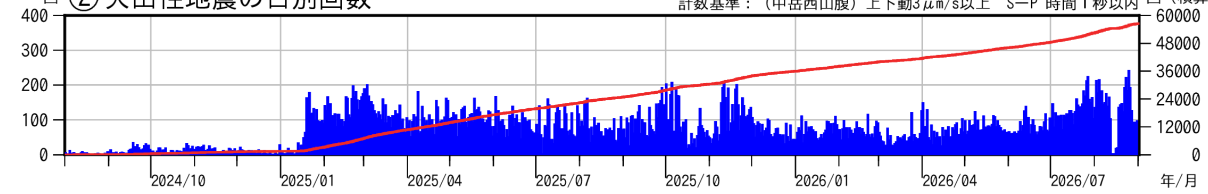
＜2026 年８月以降の状況＞
・中岳第一火口では噴煙の状況に特段の変化はなく、白色の噴煙が最高で火口縁上 1,100ｍまで上がりました。
・2025 年１月中旬頃から火山性地震と孤立型微動が増加した状態が続いています。
・８月 12 日 19 時頃から火山性微動の振幅が増大し、大きな状態となりました。14 日 15 時過ぎには中岳西山腹観測点南北動成分の１分間平均振幅で概ね 6.0μm/s と、4.0μm/s を超えさらに大きな状態となりました。その後、振幅は増減を繰り返しながら概ね大きな状態で経過しましたが、18 日頃に低下し、本日（９月１日）は 1.2μm/s 程度とやや大きな状態で推移しています。
・８月 14 日に山麓において実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の１日あたりの放出量は 2,700 トンとそれ以前と比べて急増しましたが、17 日以降は 1,000～2,300 トンと変化はあるものの急激な増減はみられません。

赤線は火山性地震や孤立型微動の回数の積算（右軸）を示します。
火山性微動の振幅が大きく、火山性地震や孤立型微動の計数ができない期間があります。
⑤、⑥及び⑧は現地調査の結果を示しています。
⑥の湯だまり量及び湯だまり面標高は、火口縁からの観測で確認しています。
⑦はアメダス阿蘇乙姫（中岳第一火口から北西約８km）の観測値です。
⑧は赤外熱映像装置で計測しています。火口底温度は湯だまり表面と南側火口壁を除く火口内の温度を示します。

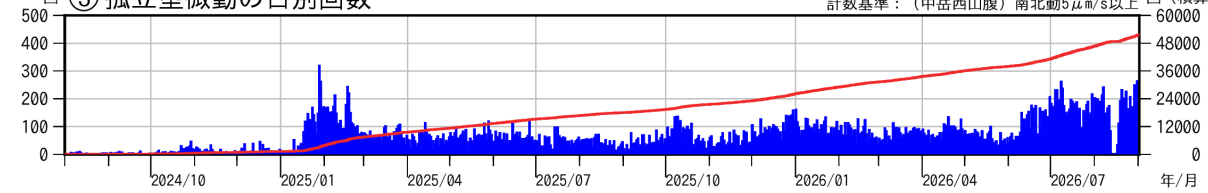
① 火口縁上の噴煙の高さ（日最高）



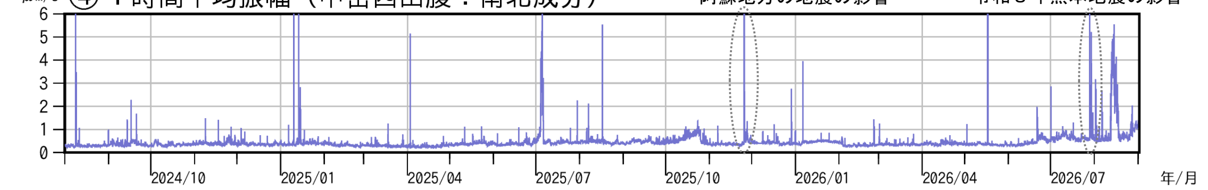
② 火山性地震の日別回数



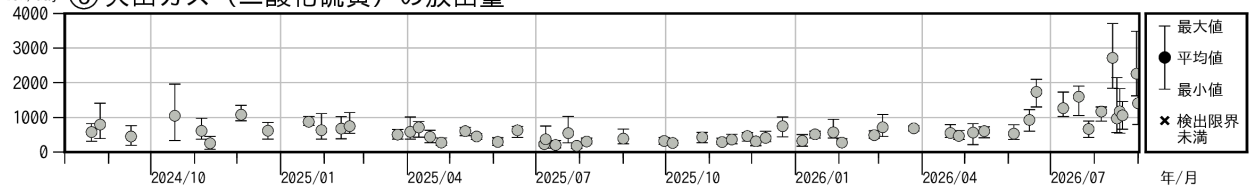
③ 孤立型微動の日別回数



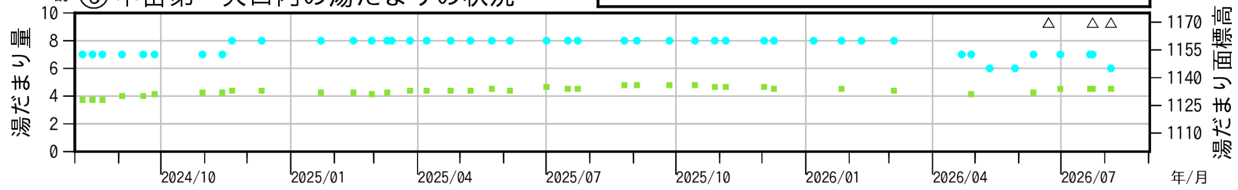
④ １時間平均振幅（中岳西山腹：南北成分）



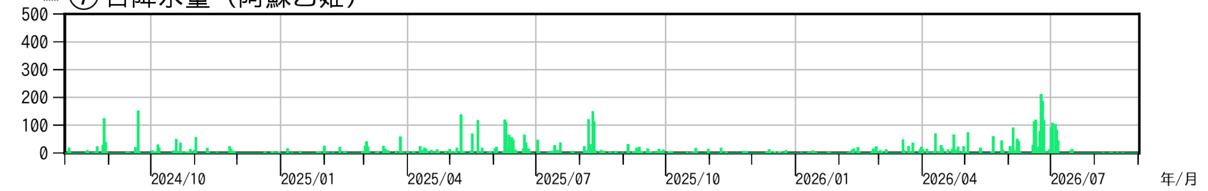
⑤ 火山ガス（二酸化硫黄）の放出量



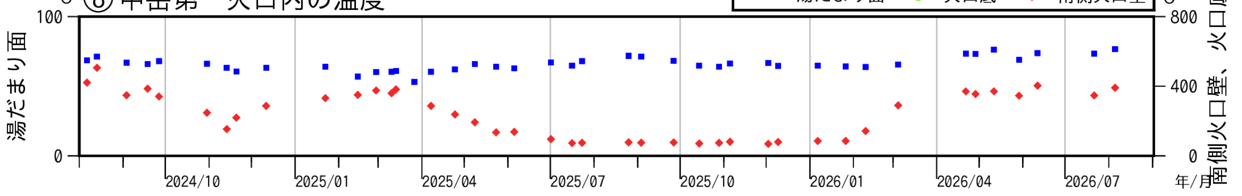
⑥ 中岳第一火口内の湯だまりの状況



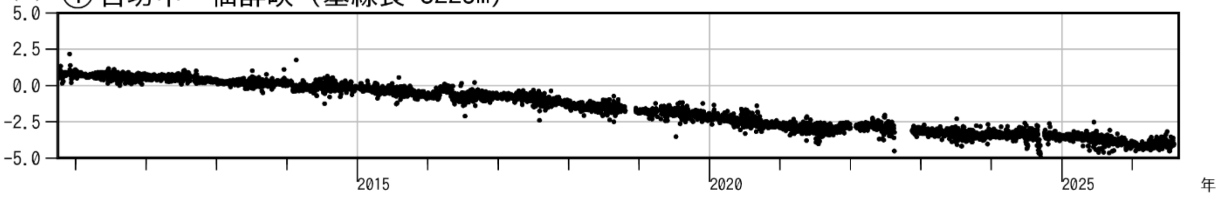
⑦ 日降水量（阿蘇乙姫）



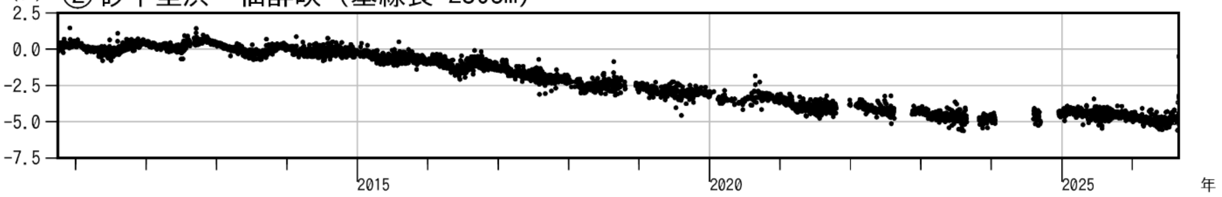
⑧ 中岳第一火口内の温度



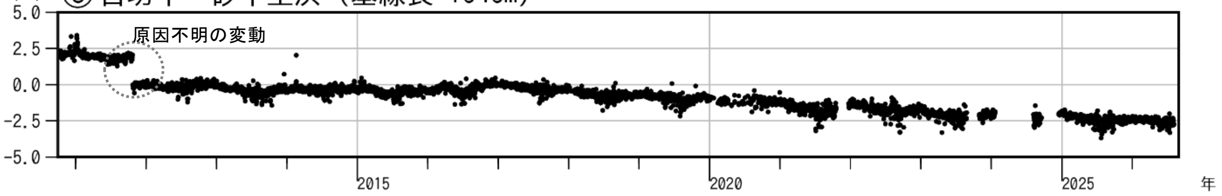
↑伸び (cm) ①古坊中ー仙酔峡（基線長 3225m）



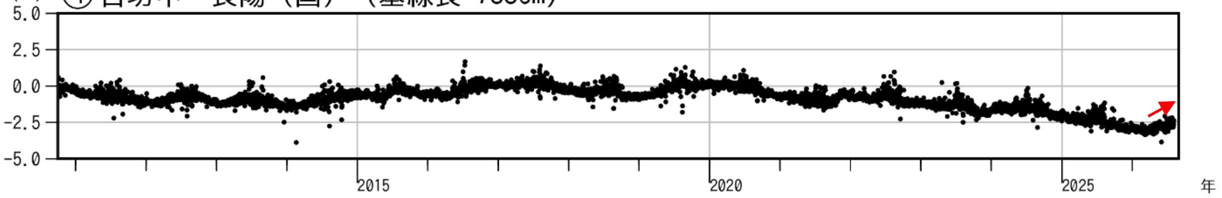
↑伸び (cm) ②砂千里浜ー仙酔峡（基線長 2805m）



↑伸び (cm) ③古坊中ー砂千里浜（基線長 1646m）

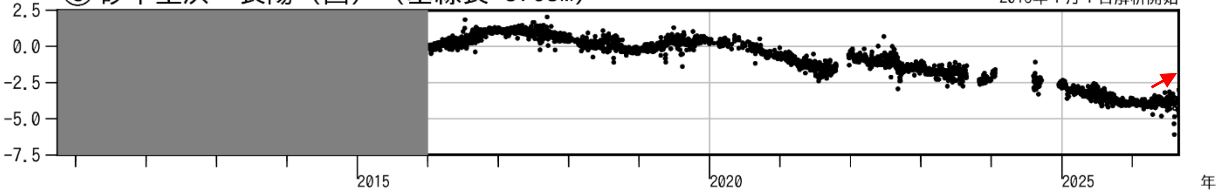


↑伸び (cm) ④古坊中ー長陽（国）（基線長 7336m）



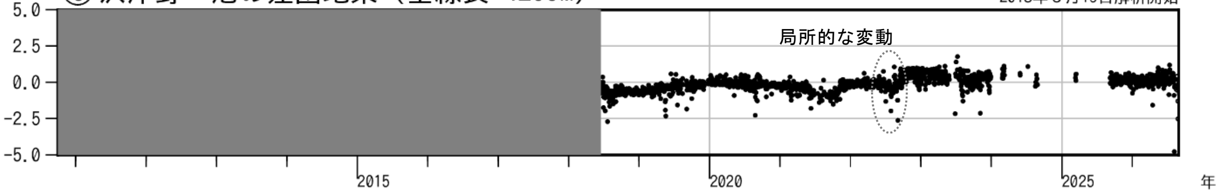
↑伸び (cm) ⑤砂千里浜ー長陽（国）（基線長 8768m）

2016年１月１日解析開始



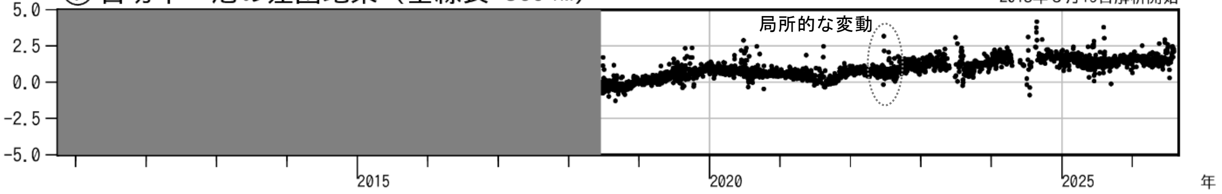
↑伸び (cm) ⑥沢津野ー池の窪園地東（基線長 4209m）

2018年６月16日解析開始



↑伸び (cm) ⑦古坊中ー池の窪園地東（基線長 3694m）

2018年６月16日解析開始



↑伸び (cm) ⑧高森（国）ー長陽（国）（基線長 13042m）

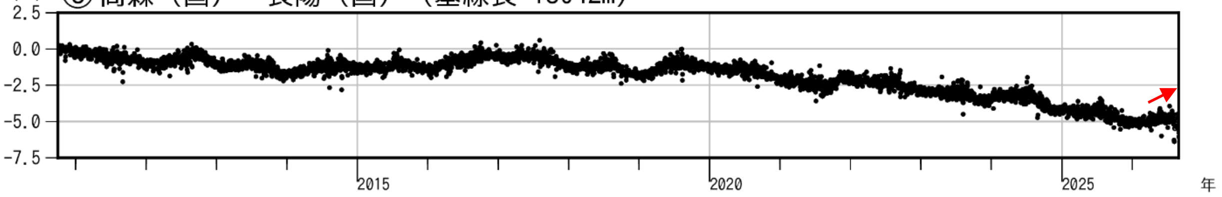


図４（前ページ）　阿蘇山　GNSS 連続観測による基線長変化
（2010 年 10 月～2026 年８月 29 日）

GNSS 連続観測では、2026 年５月頃から草千里を挟む基線（④、⑤）及び広域の基線（⑧）において、草千里付近の深部にあると考えられるマグマだまりへのマグマの蓄積を示唆する伸びが認められます。

これらの基線は図５の①～⑧に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。
2016 年４月 16 日以降の基線長は、平成 28 年（2016 年）熊本地震の影響による変動が大きかったため、この地震に伴うステップを補正しています。
2016 年１月以降のデータについては、解析方法を変更しています。
（国）：国土地理院

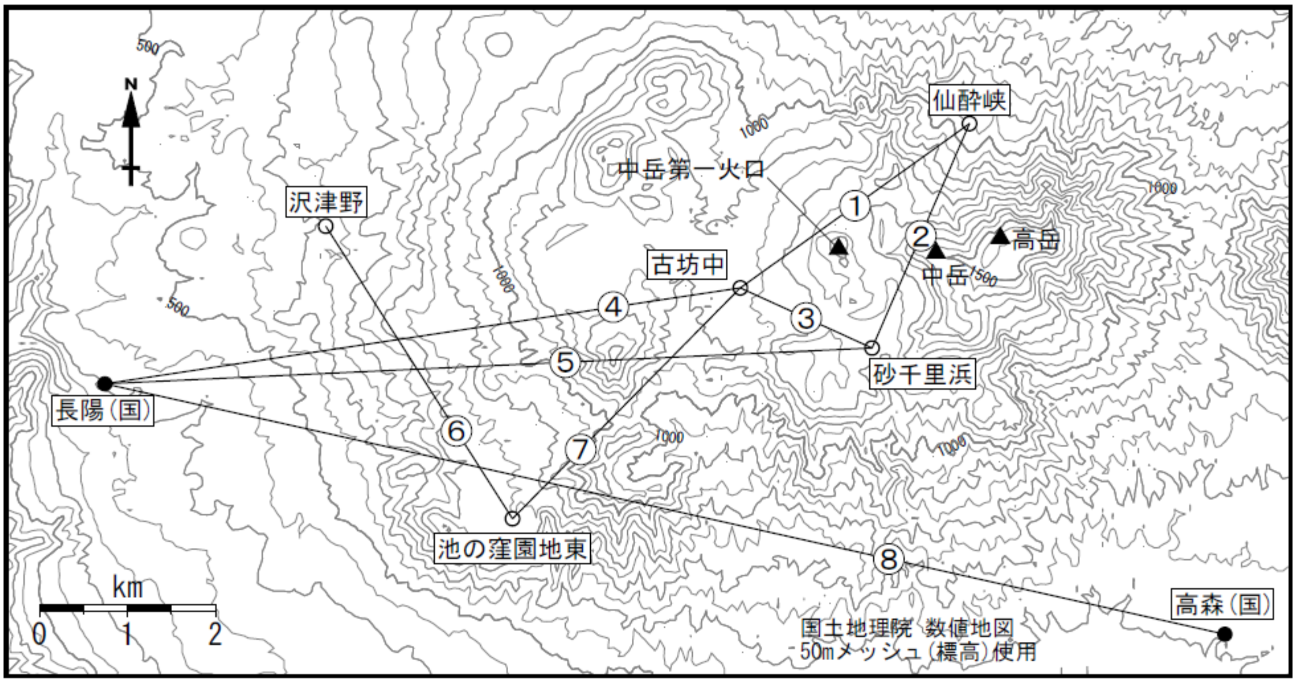


図５　阿蘇山　GNSS 連続観測点と基線番号

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（国）：国土地理院

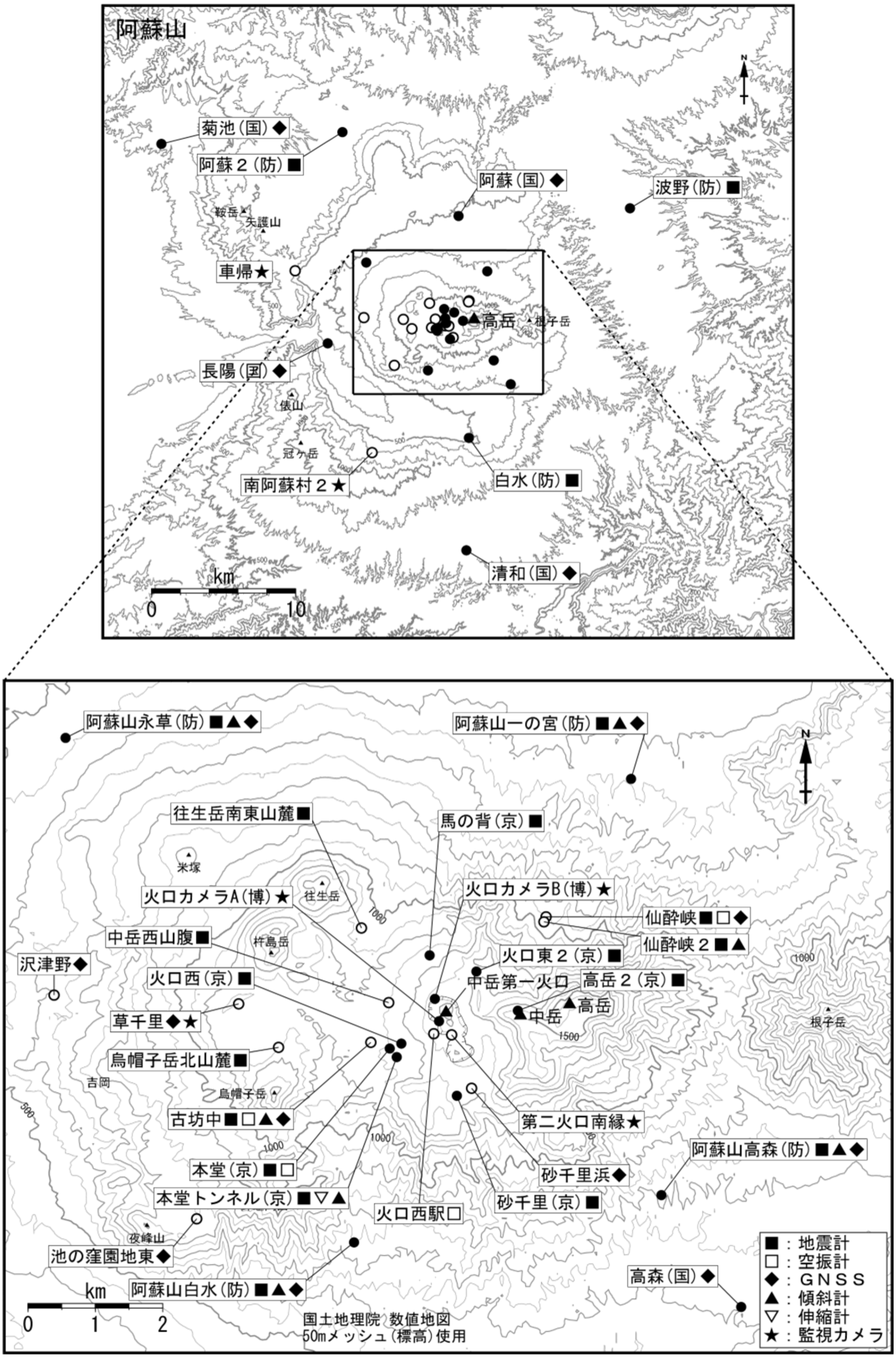


図６　阿蘇山　観測点配置図

小さな白丸（○）は気象庁、小さな黒丸（●）は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
（京）：京都大学、（防）：防災科学技術研究所、（博）：阿蘇火山博物館、（国）：国土地理院